

早期言語教育が上級レベル EFL 学習者の言語運用能力に及ぼす影響

L1/L2 教育の有無に焦点を当てて

吉田 安曇

1. 研究背景と目的

現在日本では、早期外国語（英語）教育の推進が加速する一方、その教育的効果に警鐘を鳴らし、母語教育との連携を求める声も多い（大津 2018）。このような状況を受け、母語教育及び早期外国語教育が L1/L2 運用能力に与える影響を明らかにすることが求められている。本研究では、早期 L1/L2 教育の効果を測定する試みとして、異なる早期言語教育の背景を持つ 4 つのグループに対し英語課題を実施した。本発表では、特に 3 名の上級レベル学習者に焦点を当て、彼らのエッセイライティング及び和訳を教育・翻訳文体論の観点から分析した。本研究の目的は、日本人 EFL 学習者の母語能力と外国語習熟度との関連性について示唆を得ることであり、本発表では特に以下の 2 つの問いに対する検証を試みた。

①早期外国語教育の効果とは何か。

②幼少期の母語教育は外国語習得にどのような影響を与えるか。

なお、本研究では幼少期の読書を母語教育の指標としているが、これは読書が最も身近で広く実践されている教育活動の一つであると考えられるからである。また、早期英語教育は小学 4 年生までに英会話学校等で私的に英語学習を開始したものと定義している（Djigunović 2010 参照）。

2. 先行研究

本研究に関連する先行研究は、①早期外国語教育に関する研究、②母語（L1）と外国語（L2）教育の相関性に関する研究、③メタ言語能力に関する考察、の 3 つに分類できる。①に関しては、豊永・須藤（2017）が小学 1・2 年生で英語学習を始めた場合、中学生になってからの英語学力に正の効果をもたらす可能性を示唆している。②については、例えば Yoshida (2020) による日本人 EFL 学習者を対象にしたアンケート調査及びインタビュー分析から、日本語での読書が外国語（英語）習熟度に一定の影響を与えることが推測される。最後に③であるが、秋田他（2019）は、2 つ以上の異なる言語間におけるメタ言語能力の習得により、個々の言語の相関性をよりよく理解し、また、母語と外国語双方の知識を有することで言語学習をより充実させることができると論じている。しかし、母語による読書が外国語学習に及ぼす影響について論じる研究は依然として少ないのが現状であり、また、早期英語教育と母語教育の優先についての議論も未だ決着がついておらず、今後さらなる実証研究の積み重ねが不可欠である。EFL 学習者の英語運用能力の実態を教育文体論を応用し調査した本研究は、当該分野の実証研究例として意義があると考えられる。

3. 実証研究の内容

本研究では、英語課題として、英訳（小説 2 問・論説文 2 問）、和訳（小説 2 問・論説文 2 問）、及び 2 つのエッセイライティング（What are benefits and down sides of hosting the Olympic Games? / Describe the situation in 200 years from now.）を提示した。実験の方法としては、まず大学生・高校生を中心とする計 79 名に対し、幼少期の読書経験や英語学習に関するアンケート調査と英語課題を実施し、課題の解答状況等より、分析に耐えうる 17 名の協力者を抽出した。アンケート結果から、17 名を母語教育（幼少期の読書）及び早期英語教育の有無に基づき、4 つのグループに分類し、協力者の課題を文体論的視点（文の長さや種類、無生物主語、コロケーション等）から分析し、その英語運用能力・英語の特徴・相違点等を考察した（Yoshida et al. 2022 参照）。本発表では 3 名の協力者のエッセイライティング（Describe the situation in 200 years from now.）と、『日の名残り』（*The Remains of the Day*, Kazuo Ishiguro, 1989, 土屋政雄訳）からの抜粋文の和訳分析を詳細に取り上げ、早期 L1/L2 教育が上級レベル学習者の英語運用能力に与える影響や、メタ言語能力及びバイリンガリズム育成への影響について検証した。エッセイは、語彙・文法・構文の正確さやバリエーション等への L1/L2 教育の影響を明らかにする目的で実施され、また英文和訳の課題に文学作品を用いた理由は、文章の意味や文法を正しく理解しているかという点に加え、文体や細かなニュアンスへの注意がどの程度なされているかを分析するためである。分析に関しては、教育的文体論（豊田他、2017）及び翻訳文体論（Boase-Beier et al., 2018）の手法を援用した。なお、3 名の協力者のプロフィールは以下の表のとおりである。

	学年・職業	資格	幼少期の読書	英語が得意ですか？	英語学習開始時期
A	公立大学3年生	英検1級	とても好きだった (L1)	とても得意	中学校入学以降
B	公認会計士	TOEIC 910	とても好きだった (L1)	とても得意	小学校1・2年生
C	公立高校1年生	英検1級	とても好きだった (L2)	とても得意	3-5歳

4. 分析結果と考察

まずエッセイ分析であるが、いずれの協力者も正確な文法・語彙力を駆使していることが分かった。早期英語教育経験のない協力者Aは、他の2名と比べよりフォーマルな文体を用いる傾向にあり、‘so cutting edge that SV’ といった独特のコロケーションの使用も見られた。長く複雑な文章を扱っている点には、中学入学以降のいわゆる「受験英語」の好影響が推測される一方、高い母語能力が自然なコロケーション等の英語独自のスタイルの使用を妨げている可能性があることも分かった。早期英語教育を有する協力者Bは、よりカジュアルで口語的な表現が目立った。また、‘make a progress’ といった英語らしい自然なコロケーションも見られたことから、早期英語教育の影響が推測された。協力者Cは、幼少期をアメリカ合衆国で過ごしたいわゆる「帰国子女」であり、その間、日本語での読書をほとんど行っておらず、代わりに英語での多読を経験している。この協力者のモダリティの多様性や慣用表現の使用等を見ると、幼少期におけるL2での読書が英語習熟度に有意な影響を与えることが示唆された。3名とも上級レベル学習者ではあるが、文体的技巧に関しては十分な知識・意識を有しているとは限らず、そのパフォーマンスには改善の余地が見られたことから、学習者への文体指導の重要性が確認された。

次に和訳分析の結果、母語での読書を経験した協力者A・Bは、原文を正確に把握し、自然な日本語の流れを維持しながら巧みな和訳ができていたことが分かった。その一方で、協力者Cは、原文に対する日本語表現の過不足、あるいは「このような人の一人一人」といった、ややぎこちない和訳等が見られた。以上から、幼少期のL1による読書はその後のバイリンガルとしての能力育成にとって大きな役割を果たしている可能性が示唆された。全体としては、いずれの和訳にも原文の文学的要素が十分に活かしきられておらず、たとえ上級レベル学習者といえども、文学性の再現は困難であることが明らかになった。この結果については、『日の名残り』という小説の背景知識不足も一因であると考えられる。

5. 結論

本研究の問い①「早期外国語教育の効果」に関しては、協力者のパフォーマンスに早期英語教育の好影響が見られる部分もあったが、バイリンガル能力の育成という観点においては、問題も起こり得ることが明らかになった。次に、問い②「幼少期母語教育の外国語習得への影響」に関しては、母語で習得された論理的思考力が英語表現においても有利に機能する等、ポジティブな影響が認められた。その一方で、日本語の熟達度の高い学習者が英語的発想で表現することを困難にする可能性も示唆された。以上から、本発表では、母語教育で培われたメタ言語能力の積み上げを生かすことで、外国語習得との相乗的な学習効果が期待されるのではないかと結論づけた。今後は、さらなるデータの収集と分析を行うとともに、エッセイ・英文和訳以外の総合的な英語運用能力の調査・分析が必要である。また、早期英語教育及び母語教育の効果や問題点についても、さらなる検証が必要であることを指摘し、結びとしたい。

引用文献

- 大津由紀雄 (2018) 「ことばの教育としての外国語教育」『新英語教育』、第587号、7-9.
- 秋田喜代美、斎藤兆史、藤江康彦 (編) (2019) 『メタ言語能力を育てる文法授業—英語科と国語科の連携』、ひつじ書房.
- 豊田昌倫、堀正広、今林修 (編) (2017) 『英語のスタイル』、研究社.
- 豊永耕平・須藤康介 (2017) 「小学校英語教育の効果に関する研究—先行研究の問題点と実証分析の可能性」『教育学研究』、第84巻第2号、日本教育学会、215-227.
- Boase-Beier, Jean, Fisher, L. and Furukawa, H. (eds). (2018) *The Palgrave Handbook of Literary Translation*. Cham: Palgrave Macmillan.
- Djigunović, M. (2010) ‘Starting age and L1 and L2 interaction’. *International Journal of Bilingualism*. 14(3). 303-314.
- Yoshida, A. (2020) ‘A Study on the Correlation between Reading in Japanese and English Proficiency: A Qualitative Analysis of Interviews with EFL Learners.’ *JAILA Journal* Vol.6. 2-13.
- Yoshida, A, Teranishi, M., Nishihara, T., and Nasu, M. (2022) ‘The Impact of L1 on L2: A Qualitative Stylistic Analysis of EFL Learners’ Writings’. In *Pedagogical Stylistics in the 21st Century*, ed. Zyngier, S. & Watson, G. 343-369. Cham: Palgrave Macmillan.